

# SRID NEWS LETTER

No. 383 November 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

紛争を引き起こすのは「食欲」それとも「不満」？

浅沼信爾

グローバルフェスタ JAPAN2007 参加報告

SRID 学生部 中野美緒

## お知らせ

1. 幹事会 12月10日(月) 午後6時30分から JBICにて

## 紛争を引き起こすのは「食欲」それとも「不満」？

浅沼 信爾

世銀で10数年も紛争問題の研究プロジェクトを先導してきたポール・コリアーは、オックスフォード大学のアンケ・ホフラーと一緒にした研究成果を「コリアー・ホフラーの紛争モデル」として発表した。それが **Greed vs. Grievance** (食欲対不満) 論争を引き起こした。<sup>1</sup> この論争が知られるようになったのは、論争名頭韻 (Rhyme) が踏まれていて、響きが良いからだけではなさそう。モデルは紛争を企てる側 (「紛争の供給者」) から見た紛争の費用・便益効果分析で、それを過去40年にわたる世界の紛争にあてはめて、どんな要因あるいは条件が紛争を引き起こす確率が高いかを実証的に分析したものだ。

---

<sup>1</sup> コリアー・ホフラー・モデルは、”The Collier-Hoeffler Model of Civil War Onset and the Case Study Project Research Design”, Chapter 1, Paul Collier, Nicholas Sambanis (eds.), *Understanding Civil War: Evidence and Analysis, Volume 1: Africa and Volume 2: Europe, Central Asia, and Other Regions*, 2005, The World Bank, Washington, D.C. また、これを砕いて説明したものは、Paul Collier, *The Bottom Billion: Why the Poorest Countries Are Failing and What Can Be Done About It*, 2007, Oxford University Press, New York.

その結果彼らが導き出した結論は何かというと、まず反乱をおこすためには多数の戦闘員を雇う必要があるが貧困層の若者の機会費用は低いから貧困グループの存在が紛争の好条件となる。また、武器その他の反乱費用を賄うためにはグループのうちで海外に出て働いているいわゆるデヤスポラの存在が重要だ。それに、政府側の防衛能力が低いほうがよいから、人口粗密な山間部があつて政府軍の活動がままならないような地理は、反乱にとって有利な条件になる。これらはすべてコスト要因だが、便益サイドで反乱成功の暁には何が手に入るかを考えると、ダイヤモンドのような鉱物資源があると権力についてときに簡単に富を得ることができる。「天然資源の呪」の条件だ。

政治的・経済的に抑圧された少数民族や宗教あるいはまた階層間不平等や政治的抑圧等に紛争の主たる原因と条件を探る政治学者とは、ちょっと違つたまことにエコノミスト的なアプローチで、また計量経済学のテクニックを使った国際比較を使った実証研究だ。だからこんな論争を引き起こした。さらに、結論を見ると、最大のコスト要因は貧困だということになるから、今の時流に合つた一ポリティカリー・コレクティブな政策含意を導き出したということになる。これをベースに、「紛争予防—また、ポスト・コンフリクトの場合でも—に重要なのは、貧困削減、ガバナンス、民主主義だ」という議論に結び付けるのはそう難しいことではない。

しかしコリアー・ホフラー・モデルを突き付けられて、「いやどうも釈然としないなあ。」と感じるのは私だけだろうか。世界には100何十カ国の国があり、そのうち豊かな先進工業国は20数カ国。極貧国にはサブサハラ・アフリカの国が多い。これらの国の特徴は天然資源を採取して輸出すること。そう考えてくると、「いやちょっと待った。今われわれが問題としているのは、そんな表面的な紛争国の特徴じゃなく、個々の国の置かれた歴史的環境や国際政治的環境に由来する政治の構造的な問題なンだけどな。」と反応したくなる。<sup>2</sup> 国はどのようなグループから成り立っているのか、それぞれのグループにどんな指導者層がいるのだろうか、彼ら指導

---

<sup>2</sup> たとえば、例をあげると、コンゴについてロイター等のアフリカ特派員を務めたマイケラ・ロングが書いた *Michaela Wrong, In the Footsteps of Mr. Kurz: Living on the Brink of Disaster in Mobutu's Congo*, 2001, Fourth Estate/HarperCollins Publishers, London. や世銀にいたベロニカ・リーがソマリアを舞台にして書いた小説 *Veronica Li, Nightfall in Mogadshu*, 2000, 1<sup>st</sup> Books Library, Washington, D.C. は、政治のマイクロ構造から紛争を書いている。

者はどんな国家意識を持っているのだろうか、その指導者たちの中でどんな行き違いがあったときに国と国民を危機に陥れる紛争が起こるのだろうか。<sup>3</sup> こっちの問題群のほうが紛争の理解により重要じゃないだろうか。アジアの経験からは、同じような歴史的経験と経済社会構造を共有していたマレーシアが政治的な安定を守り通し、スリランカが内戦の泥沼に落ち込んでいるのは、独立後マレーシアの民族指導者が国民統一戦線（National Front: より正確には諸民族統一戦線）を作り上げて共存体制を作りあげたのに、スリランカの指導者は選挙戦略の一環として多数民族のシンハラの民族意識をあおりたてる政治行動に出たことが原因ではないだろうか。

私の中ではまだこの問題に結論が出ていない。皆にもじっくり考えてもらいたいものです。

## グローバルフェスタ JAPAN2007 参加報告

SRID 学生部 中野美緒

日本最大の国際協力イベント、グローバルフェスタ JAPAN が 10 月 6、7 日に開催されました。今年は晴天に恵まれ 2 日間合計で約 8 万人が来場し、大盛況のうちに幕を閉じました。

会場である日比谷公園には各国大使館による特産物の販売、外務省による ODA 事業の紹介、NGO による伝統工芸品・料理の販売など、日比谷公園内を国際色豊かに彩っていました。

まさに、多様な国際協力のあり方を実感できるイベントでした。

SRID 学生部は、2003 年よりブースを出展しています。今回は、今年のグローバルフェスタ JAPAN のテーマである「家族と地球一絆の大切

---

<sup>3</sup> 権力と指導層の問題、そして政治制度の形成を理論的に分析したエコノミストの著書には、たとえば、Mancur Olson, *Power and Prosperity: Outgrowing Communist and Capitalist Dictatorships*, 2000, Basic Books, New York や Daron Acemoglu and James Robinson, *Economic Origins of Dictatorship and Democracy*, 2006, Cambridge University Press, New York. がある。また民主主義と紛争を扱った政治学者のものには、Amy Chua, *World On Fire: How Exporting Free Market Democracy Breeds Ethnic Hatred and Global Instability*, 2004, Anchor Books, New York. という異端の匂いのする著書がある。さらにまたアフリカの即して言うと、アフリカの指導者の腐敗と失敗を描いた Martin Meredith, *The Fate of Africa – From the Hopes of Freedom to the Hearts of Despair: A History of 50 Years of Independence*, 2005, Public Affairs, New York. がある。

さー」にちなんで「Free Hugs」という企画を行いました。

Free Hugs とは、アメリカで始まった運動で、人に対する畏敬の念をこめ、ハグを通じて人の温かさを感じようとするものです。日本でも広まり、都内で Free Hugs を行うキャンペーンを見かけることもあります。

SRID 学生部では、笑顔と人の温かさを通じて日比谷公園をひとつに繋ごうという主旨のもと、玉川大学の学生さんにご協力いただき、ブースの前でハグを呼びかけました。ハグをすれば自然と笑顔が生まれ、ハグを通じて来場者との交流を図ることができました。

また、短い時間でいかに私たちの活動を伝えることができるかということを考え、SRID 学生部メンバーの声を直接届けようと「スタディーツアー報告会」を行いました。これは、2005 年度カンボジア・スタディーツアー、2006 年度エチオピア・スタディーツアーに参加したメンバーの協力を得て、SRID 学生部だからこそできるスタディーツアー、SRID 学生部スタディーツアーに参加する意義について話してもらいました。

発表者は来場者と談笑を交えながら、自分の体験を楽しそうに話していました。

毎年、グローバルフェスタを機に、SRID 学生部の活動に参加するようになった方は多いです。

グローバルフェスタ後に開催された SRID 学生部 OB である秋田智司さんの講演会には、学生・社会人約 30 名が集まり、国際協力における企業の役割という興味深いテーマについて話し合いました。

グローバルフェスタ JAPAN を通して、国際協力に関心のある方、実際に国際協力の分野で活躍している方々と出会うことができ、SRID 学生部メンバーにとってもよい刺激となりました。

最後になりましたが、SRID 学生部ブースまでおこしいただいた本会のみなさま、SRID 学生部 OBOG のみなさま、お忙しい中誠にありがとうございました。